

『今月の天候と農作業』

通巻第5645号

11月号

令和2年10月29日発行

宮崎県

宮崎地方気象台



【 予報のポイント 】

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は平年並か高いでしょう。

【 確 率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	20	40	40
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	30	40	30

【 予想される向こう1か月の天候 】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。期間の後半は、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に曇りや雨の日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。2週目は、高い確率50%です。

<1 週目の予報> 10月31日(土)～ 11月6日(金)

高気圧に覆われて晴れる日が多いですが、期間の中頃に前線の影響で雨の降る日があるでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、

週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2 週目の予報> 11月7日(土)～ 11月13日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 11月14日(土)～ 11月27日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆大豆

一 収穫と乾燥

収穫時に大豆の青立ち株や雑草が混じると茎汁で汚損粒の原因になります。青立ち株にはカメ虫被害粒も多いので必ず抜き取ります。

成熟期は完全落葉し莢色が黄色から変色し、莢がとカラカラと音がする頃です。コンバイン収穫では、まだ茎水分が高いのでさらに10日程過ぎ、枝がポキポキ折れる時で、茎水分の高い早朝は避けます。バインダーや刈払機では衝撃でのロスを防ぐため早朝か夕方に行います。播種が遅れた圃場では莢の位置が低くなることがあるので、泥の混入に注意します。

乾燥作業では、高温ではしわや皮切れを起こすため温度を30度以下にします。

◆ソバ

一 収穫と乾燥

バインダーや手刈りでは、子実の70～80%が黒変した頃の朝夕に行い、10日程島立てし子実が粉状になるまで乾燥します。コンバインでは、80～90%黒変した時ですが、茎葉に水分が多いと機械に詰まるので注意します。乾燥は静置式乾燥機などで温度は30度以下とし、その後は風選し、粒選別機などで夾雑物を除きます。

◆麦類

一 圃場の準備

排水良好な圃場を選び、碎土は丁寧に行います。麦は酸性土壌に弱いので、石灰質資材で酸度を調整します。堆肥は1t程施用し元肥は地区基準を参考にします。

二 種子消毒と播種

黒穂病、斑葉病対策として種子消毒を行います。播種は早すぎると凍霜害を受けやすく、遅れると穂数不足になります。山間部では十一月中旬、沿海部では同下旬から十二月始めに行い、周囲や3～5畝間隔に溝を掘り湿害対策を行います。

(荒砂 英人)

施設野菜

◆施設野菜全般

11月末までは寒暖の差が大きいため、夕方早めに内張ビニルを閉めきって保温すると、ハウス内の湿度が高まり、病害が発生しやすくなります。最低気温を確認しながら、加温機が稼働する程度の温度管理を心掛けましょう。比較的低温で管理する作物は、夜温が下がらない場合、内張ビニルを閉める時間を遅くするなど、状況に応じた管理を行います。

◆きゅうり

ハウス抑制栽培は子づる及び孫づるの収穫期となり、草勢が低下しやすいいため、不良果は早めに摘果します。かん水は反当2t/日を目安に行い、追肥は草勢や着果状況に応じて施用します。

促成きゅうりは、主枝から側枝の収穫期となります。一作を通して継続的に安定した収量・品質を確保するためには、草勢をコンパクトに仕上げ「成りグセ」をつけることが大切です。夜温が高い場合、内張ビニルを開けて、植物の結露を防止する対策を行います。かん水は果実肥大に合わせて、かん水量を少量にして回数を多くします。

◆ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量も多くなり、最初の収穫最盛を迎えます。作物本体への着果負担も大きく、草勢低下に留意して適期収穫を心掛けましょう。草勢維持のため、果実の着果状況に応じてかん水、施肥管理を行います。収穫の終了した懐枝を順次除去し、通風、採光の改善を図りましょう。

◆トマト

促成栽培は収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水と追肥をおこないますが、追肥は草勢を見て、大玉トマトで第3果房、ミニトマトで第5果房の開花時より開始します。

◆いちご

今年の花芽分化・頂芽の出雷はほぼ平年並みですが、地域によって早晚が異なるようです。日中に施設内温度が高く、追肥の量が多い場合に、チップバーンによるがく枯れに注意しましょう。また、電照の開始時期となりますが、夕方の日長延長は2.5時間、間欠電照は夕方5時から翌朝6時までで5分間/時間、暗期中断は深夜1時間を目途に開始し、その後は新葉の伸びや葉色に応じて時間調節を行います。

(吉山 健二)

葉茎根菜類・いも類

◆食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期です。地上部の生育が悪かったほ場のものや収穫が遅れたもの、雨天後収穫のものは貯蔵性が劣るので、長期貯蔵は避けます。傷のついたりもは貯蔵中に腐敗しやすいので収穫作業は丁寧に行いましょう。また、翌年の苗を取るための種芋は、病害の発生したほ場からは取りません。貯蔵中に腐敗したものはすぐに取り除きましょう。収穫直後のいもは呼吸作用が大きいので、一度に大量に入庫すると貯蔵庫内のCO₂濃度の上昇や、湿度が高くなりすぎて結露する場合があります。入庫時から空調を積極的に利用して結露を防ぎましょう。空調が無い場合は貯蔵適温の時間帯に換気して庫内を除湿し、新鮮な空気と入れ替えましょう。貯蔵期間中は温度13℃、湿度90%であることをこまめにチェックしましょう。

◆さといも

翌年の種芋保管のためには「枯れ上がり症状」の見られたほ場や、「芽つぶれ症」、「乾腐病」の疑いがあるものは避け、優良なものだけを子いもが離れないように株毎に茎部を下にして保存します。ほ場で保存する場合は、低温障害をうけないよう、厚めに培土するなどの対策が必要です。

◆さといもやかんしょなど収穫後の片付け（次作に向けて）

各種病害の伝染環を絶つため、収穫が終わった畑は速やかに片付けます。残さは可能な限りほ場外に持ち出し堆肥舎で腐熟させます。ほ場外に持ち出せない残さはトラクター速度を遅く、ロータリー

回転を早くして、細かく破碎します。畑や畦畔、水路近くに残さを放棄することは決してしないでください。無発病の畑や種芋採取用の畑に入るときは、病気や線虫の伝染を防ぐため、長靴や農機具を洗浄して使いましょう。

◆たまねぎ

定植時期となります。地力の高い排水の良いほ場を選定し、十分な根域を確保するための深耕や、表面排水を促すための排水溝の整備をします。排水があまり良くない畑では、可能な限り畦を高くします。

植付けの深さは3 cm程度です。深植えすると収穫時に縦長球（レモン球）が多くなるため注意が必要です。植付け後3～5日間は株元にかん水を行い活着を促します。

◆らっきょう

分球を始める時期です。分球及び生育促進のため、10 a当たり窒素成分で5 kg程度を追肥し、土寄せを行ってください。

(川崎 佳栄)

果樹

一 常緑果樹

◆かんきつ全般

樹体に肥料が吸収され、秋肥の効果を十分に果たすためには、12℃以上の地温が必要とされ、今月がその時期に当たります。年明けに収穫される日向夏や不知火などのかんきつ類ではこの時期の施肥が、翌年の花芽充実に有効とされています。11月中旬までに施肥を行いましょ。

◆日向夏の落果防止

日向夏は土壤の乾燥や施肥不足等により、秋から冬の落果が助長されます。落果防止剤（マデック乳剤）を11～12月に散布しましょう。

◆完熟きんかん

今年の生育はやや早めの傾向です。既に十分な肥大が確保されている園では、着色に向けて、昼温が高くなりすぎないように管理します。肥大不足の園では、秋季加温を継続します（昼間の温度は28℃、夜間は外気温+3℃を目安とする）。

◆マンゴー

花芽分化に向けた管理として、昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度で抑え、夜間の最低気温6～8℃程度を維持します。

十分な低温に遭遇することで、自然に花芽が伸長し始めます。五割程度の出蕾を確認したら、ハウスの夜温を15℃に向けて徐々に上げていきます。急速に温度を上げて花芽を生長させると、花粉や子房の形成不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を助長します。できるだけ昼間の高温を避け、じっくりと花芽を生長させます。

二 果樹園共通

防風林や防風ネットの整備は、冬の仕事です。防風林は、あまり密閉状態にせず、適度に風が通るように整理します。防風ネットは、傷んでいる部分をしっかりと補修しましょう。

(鈴木美里)

花 き

◆キク

11月になると、気温の低下に伴って植物体が結露しやすくなり、白さび病の発生リスクが高まりますので、曇雨天時は送風を行うなどして、結露防止に努めます。

年末出荷作型は摘蕾期になります。花のボリュームを出すために、摘蕾作業は適期に実施します。

◆スイートピー

採花開始時期となります。

安定した着花を促すために、徐々にかん水を控えるようにします。

また、曇雨天後の晴天が予想される場合は、あらかじめカルシウム剤を葉面散布するなどして、生長点や葉の焼けを防止する対策を取るとともに、必要に応じて遮光を行います。

夜間の加温が必要な時期となりますので、早めにダクトを設置するとともに、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を開始し、うどんこ病及び灰色かび病対策に早いうちから取り組みます。

◆デルフィニウム

沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を活用して茎の硬化を図るとともに、収穫後は適切な前処理を行うことで花落ちを防止します。

また、2番花のロゼットを回避するため、1番花の花穂伸長終了時から電照を開始してください。

◆トルコギキョウ

生育後半の過剰施肥と曇雨天によりプラスチックが多発しますので、追肥は発蕾前に終わってください。

一方、10月定植株は葉先枯れ症状（チップバーン）が発生しやすい時期となりますので、徐々にかん水を控えて根域を広げるとともに、適宜カルシウム剤の施用を行います。

◆ラナンキュラス

気温及び地温が低下しますので、徐々にかん水間隔を広げて根の伸長を図ります。

夜間の加温が必要になりますので、早めにダクトを設置するとともに、微生物農薬（バチルス菌）のダクト散布を開始しましょう。

また、日中の温度が低すぎると生育が緩慢になりますので、15℃を目安にサイドや妻面等の開閉を行い、品質向上並びに増収を図ります。

(藤原 明紀)

畜産

◆家畜防疫対策

豚のCSF（豚熱）は、九月二十六日に、群馬県で六ヶ月ぶりに発生が確認され、その後の発生はみられていないものの、野生イノシシでは、感染地域が拡大しており、防疫対策の徹底が重要となっています。また、ASF（アフリカ豚熱）は、十月六日に韓国で十六例目の発生がっており、これらの法定伝染病から、農場を守るため、消毒等の侵入防止対策を徹底します。

さらに、鳥インフルエンザについては、発生リスクが高まる時期に入りますので、防鳥ネットの点検補修を行い野鳥や野生動物の侵入を防ぎます。

◆家畜

今月は朝晩の冷え込みが厳しくなる時期に入りますので、朝夕の畜舎カーテンの開け閉めを行い、畜舎内の温湿度環境の改善を図ります。また、本格的な冬を迎える前に、幼畜用の保温機材の点検と、子牛の保温箱や風よけ等の寒冷対策の準備を行います。さらに、牛では、飼料作物の収穫と作付けの時期でもあり、観察不足による繁殖成績の低下が懸念されることから、交配期にある牛については、朝夕の観察の徹底を図ります。

◆飼料作物

牛の粗飼料では、飼料用稲、二期作・遅まきトウモロコシ、ソルゴーなどの収穫時期と、イタリアン・エン麦などの、秋冬作の作付け時期が重なる時期です。飼料作物の栽培においては、飼養管理に影響が出ないように計画的な作業を行い、良質粗飼料の確保に努めます。

（三角 久志）

特用作物

◆ 茶

一 寒害・凍害防止対策

近年は暖冬傾向で茶樹の耐寒性獲得が遅れる傾向にあり、秋冬期（十一月～十二月）防霜の重要性が高まっています。更に、冬期の寒害・凍害の防止対策では、防風垣や防風ネットを設置します。

また、幼木園では敷草の全面施用は幹割れが発生しやすくなるため、敷草はできるだけうね間中央に寄せるようにします。万一、幹割れが発生した際は、速やかに株元へ土寄せを行います。

二 病虫害の防除

一番茶前の密度増加が気になるカンザワハダニに対しては、整枝・裾刈り後に行う越冬前の防除が重要です。飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への薬剤付着状況を確認しながら、専用ノズルを用いた適正防除につとめます。

また、県内茶園ではチャトゲコナジラミの発生が拡大しています。マシン油乳剤によるカンザワハダニとの同時防除を行います。

（松尾 啓史）

◆しいたけ

一 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで実施します。クヌギやコナラの場合、葉が三～七割程度黄葉する十一月下旬頃までが、伐採に適しており、樹皮の剥がれにくいほだ木となります。良いほだ木づくりのため、適期伐採を心がけます。

また、伐採後は葉枯らし乾燥を四十～六十日程度実施します。

二 発生操作

ほだ起こし作業は、一般的に十月～一月に行いますが、品種によって発生温度帯が異なるため、品種の特性を十分に理解して作業時期を決めます。また、ほだ起こし後に散水を必要とする品種や、水分供給を遮断して抑制を必要とする品種がありますので、使用品種の特性に合った管理を行います。

なお、風が強く吹き込むほだ場は乾燥によってしいたけの生育が不良になったり、変形しやすくなるので、防風ネット等を設けると良いです。

(古澤 英生)

◆たばこ

今月は来年作に向けての準備が主な作業となります。

一 葉たばこの大きな減収要因である立枯病・疫病等の土壌伝染性病害の菌密度の低下と、土壌消毒の効果を向上させるため、冬期耕耘を十日おきに三回以上行います。

二 耕作予定ほ地の土づくりのため、石灰・ようりん等の散布を行い土壌改良に努めます。

石灰散布をする場合は、石灰に消毒剤の成分が吸着され効果が半減するので、消毒処理1ヶ月後に散布します。

三 土壌消毒を実施する際には、薬害、公害のないよう十分注意し、農薬使用基準に則って土壌水分が六十%程度（軽く握った時に割れ目が二～三個できる程度）の時期を選んで実施します。

また、土壌消毒剤の空缶は、地域で決められた方法で適切に処理します。

四 良質堆肥（十アール当たり一、二〇〇kg以上）施用に向けて、材料を十分に確保しましょう。

また、未熟堆肥投入を避けるために水分六十%程度保ちながら月に一回程度切り返しを行い、堆肥の腐熟促進を図ります。

さらに、塩素グレー発生防止のため脱塩した堆肥を使用します。

五 販売終了後は、乾燥室・貯蔵庫・作業場の清掃を徹底します。

(宮崎県たばこ耕作組合)

内容の詳細について

11月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県農業経営支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ。

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	やや少	アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って侵入防止に努めます。一部の地域で、ネオニコチノイド系薬剤に対する感受性低下が確認されているので、使用薬剤については地区の普及指導員や技術員の情報を参考にします。
	ハスモンヨトウ	並	中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。なお、施設開口部には防虫ネットを張って野外からの侵入を防止します。
冬春きゅうり	べと病	多	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。 さらに、窒素切れによる草勢の低下や逆に効き過ぎによる過繁茂は、発病が助長されるので適正な肥培管理に努めます。
	うどんこ病	やや少	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病 (MYSV)	並	ミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病(MYSV)の感染を確認した場合は、速やかに罹病株を抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封するなど適切に処分します。
	ミナミキイロアザミウマ	並	
タバココナジラミ	少	薬剤散布後は防除効果を確認し、不十分な場合は、異なる系統の殺虫剤による追加の防除を行います。	
冬春ピーマン	斑点病	並	いずれの病害も多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。うどんこ病は、乾燥した条件で発生しやすいので過乾燥に注意します。 黒枯病は、多湿条件で発病しやすいので排水を良好にするとともに、マルチの利用、日中の換気を行います。
	うどんこ病	多	
	黒枯病	やや多	
	ミナミキイロアザミウマ	並	ミナミキイロアザミウマは10花当りの寄生虫数が1頭から防除が必要とされています。多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底します。 ヒラズハナアザミウマも早めに防除し、密度の抑制に努めます。 両種とも青色粘着板(300~500枚/10a)による誘殺に取り組み、生息密度を抑制します。
	ヒラズハナアザミウマ	並	
冬春トマト	葉かび病	並	どちらも多湿条件下で発生しやすいので、施設内が過湿にならないように換気に努めます。また、多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。
	すすかび病	やや多	
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	並	トマト黄化葉巻病は、タバココナジラミによって媒介されるので有色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、ビニール袋等に入れてほ場外に持ち出し完全に枯れるまで密封するなど適切に処分します。
タバココナジラミ	並		
冬春いちご	うどんこ病	やや少	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。 炭疽病は、多湿にならないようにほ場の排水対策を十分行うとともに、発病株は周囲への感染を防止するため早期に除去し、ほ場外に持ち出し適正に処分します。
	炭疽病	少	
	ハダニ類	並	寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。ハダニ類は天敵カブリダニによる防除を実施します。
アブラムシ類	やや少		
かんきつ類	ミカンハダニ	やや少	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生葉率30%または1葉当り虫数0.5~1頭を目安に防除する必要があります。また、収穫前の防除は、収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	やや少	本県では冬期においてもダニの繁殖が見られるため、越冬前の防除がより重要です。この時期の防除が十分でない翌年の一番茶への影響が大きくなります。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
2) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。

